

ヒンディー語文献から見た詩論書・文学理論書

町 田 和 彦

この小論ではヒンディー語で書かれた詩論書を研究する際配慮すべき視点を提示し、初期のヒンディー詩論書の若干の特徴を指摘する。但し韻律学には触れない。

〈ヒンディー詩論書を研究するための視点〉

一般に、ヒンディー詩学をサンスクリット詩学の延長に置いて、単に学問上の系譜の上からのみ評価する傾向がある。そして殆どのヒンディー文学史家は、学問としての初期のヒンディー詩学の質について辛辣な意見を述べている。この根拠として、体系として頂点を極めた観のあるそれ以前のサンスクリット詩学の総体、ヒンディー詩論家が必しも完成されたサンスクリット詩学に完全には精通していなかった事実、彼らが詩論書を書いた動機は学問的興味よりはむしろ実利的関心であつた事情、等を挙げている。これらはいずれも否定できない現実ではあるが、ヒンディー詩学を正当に評価するため問題を再考したい。

問題を(1)詩論書成立の背景、(2)詩論の理論的側面に分けて考える。

(1)詩学 (Kāvyaśāstra)・文学理論は1つの学問ではあつても自然科学のような普遍的・絶対的な法則・基準を前提とするものではない。文学という言葉を媒体とする高度に人間的な芸術を研究対象とするため、背景となる文化・価値基準・審美観に応じて独特の体系を持つ事が可能である。更に詩論家を中心に言えば、同時代の文学嗜好の傾向・思潮・学問的伝統といった環境因子と、詩論家自身の資質・教養・職業といった個人的因子も詩論書の内容を決定する要素である。

(2)詩学が研究対象とする言語芸術は、作者 (kavi) とテキスト (kāvyā) と鑑賞者 (sahṛdaya) の三者が相互に関係しあつて成立している。従つてこの三者が各々と関係する次の三つの在り方が想定される。

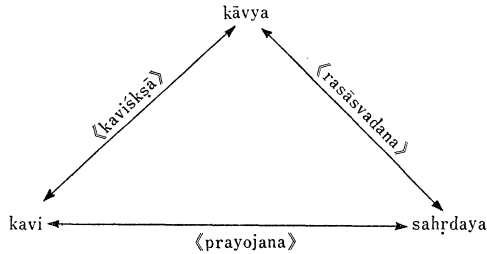
①作者とテキストの関係は所謂詩人教育 (kavi śikṣā) に属する。例えば alaṃkāra, rasa, dhvani は幾通りあるのか、詩作の際各々を如何に効果的に使用すべきか、が問題となり教示される。

②テキストと鑑賞者の関係は主に rasa の味わい (rasāsvādāna) という主題の元に論じられ、詩学の規範からみた欠陥 (doṣa), 美質 (guṇa) もこの中で論議さ

れる。

③鑑賞者と作者の関係では、詩人は鑑賞者に何を伝達するため詩作するのか、という事が問題とされる。即ち詩作の目的 (prayojana) が扱われる。

以上の事を図示すると下の如くなる。



〈初期ヒンディー詩論書の若干の特徴〉

一般に言語史の観点からは、ヒンディー語を含む近代インド・アーリアン諸語の歴史は西暦 1000 年頃より始まるとされる。又ヒンディー文学史の観点からも、ほぼこの時期より、先行する中期インド・アーリアン諸語の各種ブラークリット・アパブランジャの文学から、主題・文体・傾向・韻律を継承したヒンディー文学が発展した。一方詩論書の分野においては、一般に 16 世紀の中頃の Kṛpārām 作 Hittaraṅgiṇī をもつてヒンディー詩論書の嚆矢とし、実質的には 16 世紀末・17 世紀初めのヒンディー詩論家 Keśavdās 以降が問題となる。こうしたヒンディー語で書かれた詩論書の、他の文学ジャンルに比べた出現の遅れの大きな理由は、他の学問の例にもれず、詩学の分野においてもサンスクリットが伝統学術言語として用いられていた事である。因に Keśavdās の約半世紀後、シャーージャハーン帝と同時代の Jagannātha はサンスクリットで Rasagaṅgādhara を作している。従つてヒンディー文学において大きな転換期である 19 世紀の中頃までを、ヒンディー詩論書の初期の歴史と便宜的に規定する。この区分はヒンディー文学史上 Bhakti 時代の末より Rīti 時代までを含めた時期にあたる。従つて特にこの時期のヒンディー詩学を Rītiśāstra と呼ぶ事もある。rīti という語はヒンディー文学の文脈で用いられる時、サンスクリットの「文体」という意味よりも広く、「詩の作法」又は「詩道」の意味で、当時「道」を意味する panth という語も同義に用いた。Bhagīrath Mīśra の「ヒンディー詩学の歴史」には、この時代区分に含まれる 42 人の詩論家と各々の作品の解説がある。

ムガル帝国が分裂衰微していく過程で、当時のデリーの詩人を含む芸術家達は地方の有力な封建領主に経済的庇護を求めて散つていった。当時の封建領主の生活は豪奢で俗世の享樂を異常なまでに追求し、趣味としての芸術が愛好された。こうした一種のディレッタントに奉仕した詩人の職業は世襲であり、低い階層に属していた。この時代のヒンディー詩論書は専らこうした詩人達自身によつて書かれた。その目的は非常に明確で、主人のために、あるいは詩人という職業を世襲する後継者たる我が子に詩作の教科書を作る事だつた。彼らの主な仕事は、Mammaṭa の Kāvyaṣaṣṭra, Viśvanātha の Sāhityadarpaṇa を手本に、それらを当時のヒンディーの文学語である Brajbhāṣā で主に韻文の形で移しなおす事だつた。

彼らが手本としたサンスクリット詩学の理論面は Mammaṭa の Kāvyaṣaṣṭra (11世紀末頃)において一応完成された。dhvani, alaṃkāra, rasa, rīti, vakrokti といった個別の理論は、dhvani を根底に全て整然と組み込まれ体系化された。又 Keśavdās の時代までに詩学の各部分、例えば dhvani, alaṃkāra, nāyikā bheda 等は煩雑なまでに細分類が進み、混乱の様相を呈していた。こうした詩論の成果と状況、又時代の風潮が初期ヒンディー詩論書の性格をかなり制限した事実は無視できない。加えてこの時代の詩論家とされる人々の多くが本来宮廷詩人であり、サンスクリット詩学に精通した学者ではなかつた事も看過できない。

最後に一つだけこの時代の詩論書の独自性を挙げるなら、時代の精神を反映して rasa 特に śṛṅgāra rasa と、それと密接に関係する nāyikā bheda の解説に精力が傾けられた事である。詩論の主題に dhvani ではなく、不完全ではあるが rasa を復活させた事は、以降のヒンディー詩論書の特徴と方向を決定するものとして重要である。

参 考 文 献

- (1) Miśra, Bhagīrath: Hindī kāvyāśāstra kā itihās, 1965.
- (2) Nagendra (ed.): Bhāratīy kāvyāśāstra kī paramparā, vol. 1, 1975.
- (3) Nagendra (ed.): Hindī sāhitya kā itihās, 1976.
- (4) Nagendra: Rīti-kāvya kī bhūmikā, 1977.
- (5) Varmā, Dhīrendra (ed.): Hindī sāhitya, vol. 2, 1959.

(東京外国語大学助手)